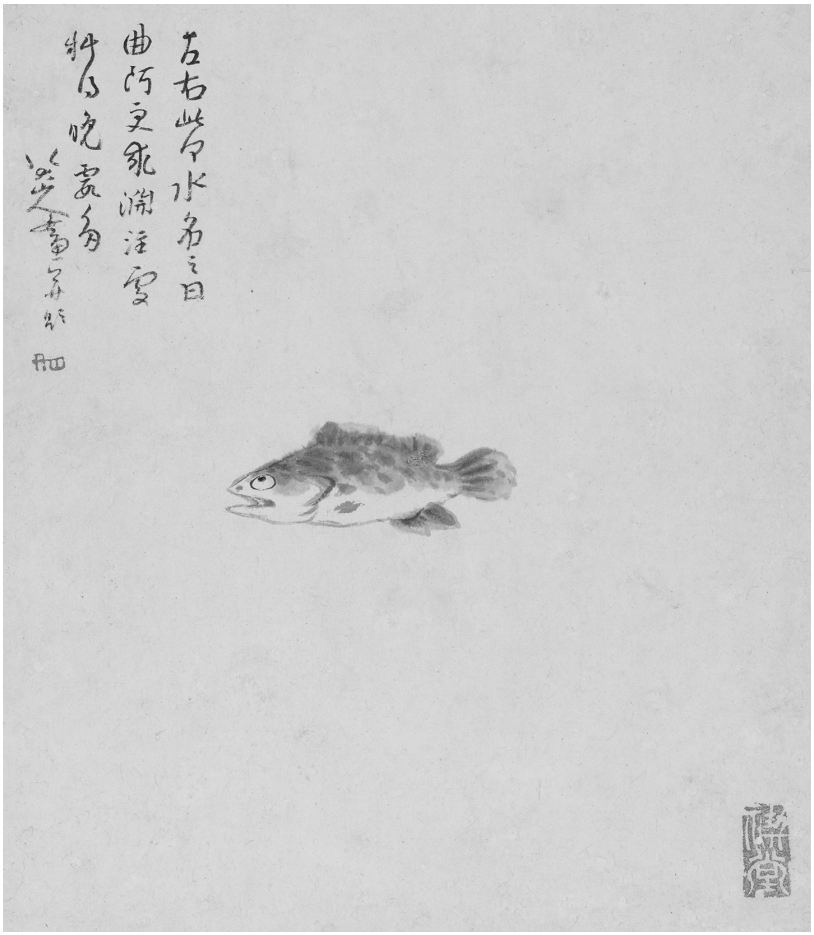
日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇二〇年（令和二年）十二月二〇日
第二號（通巻第三十八號）



八大山人「安晩帖」鰥魚図（泉屋博古館蔵）

目録

巻頭言
二　辞任の弁　金　文京
四　コロナ以前の「戴復古五律読書会」　坂井多穂子
六　中国文芸研究会―創設50年、研究誌100号超の老舗研究会　松浦　恆雄
八　北京の私設図書館「雑・書館」訪問記　呉　雨彤
一〇　日本中国学会二〇一九年度（平成31年・令和元年度）収支決算書／二〇二〇年度（令和二年度）予算書
十二　各種委員会報告　大会委員会／出版委員会／選挙管理委員会／将来計画特別委員会
十四　二〇二〇年度　会員動向／新入会員一覧
十六　二〇二一―二二年度　役員一覧
十七　事務局からのお知らせ
十九　「日本中國學會報」論文執筆要領
二〇　本年度大会についてのアンケートのお願い／「国内学会消息」についてのお知らせ

編集◉出版委員会　静永　健
〒819-0395　福岡市西区元岡744　九州大学文学部
メールアドレス：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp
発行◉日本中國學會
〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25　斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

辞任の弁

理事長
金　文京

退任の弁を書くつもりが、急遽辞任の弁になってしまった。その理由を説明する前に、まず先般の第72回大会について、開催校の慶應義塾大学の関係者、研究発表、司会を担当された方々、および参加してくださった会員諸氏にお礼を申しあげたい。はじめてのオンライン開催、しかもコロナ災害の中で多くの学会がズーム開催であったのに対し、本学会はあまり類例のないオンデマンド方式によって、通常の学会にくらべても遜色のない、多くの会員に参加していただいた。さいわい事故もなく無事に終了し、胸をなでおろしている。本学会としてもはじめての試みであり、今後の大会のあり方にも影響するであろう。そこで将来計画特別委員会からの提案により、今回の大会についてアンケートを実施することになった。詳しくは本号の最終ページをご覧のうえ、是非アンケートに回答していただくようお願い申し上げます。

理事長に就任以来、不祥事の連続であった。昨年、関西大学での大会は台風のため直前に中止、しかし自己弁護になるが、これは相手が台風なので、やむを得ない面もあった。参加費などを返却するため、学会の経費を使ってしまったのも、まあお赦しいただけるのではないかと思う。

しかし今回、学会賞受賞理由のミスにより、学会報を再発行、再発送したことについては弁解の余地がない。ミスは当初、印刷所が犯した。しかしその後、校正の機会が再三あったにもかかわらず、気がつかず見逃してしまったのである。訂正版の印刷費は痛み分けで印刷所がもってくれたが、会員への再発送費28万円余りは学会の負担となった。本来なら使う必要のまったくないお金である。しかも膨大な量の紙を浪費してしまったことが、私としては悔やまれる。

これだけの不祥事を引き起こして、誰も責任を取らないということは、ありえないだろう。では誰が責任を取るのか。それはトップの理事長に決まっている。というわけで、この便りが刊行される日をもって、理事長職を辞任いたします。

あとは、来年三月まで小島副理事長に理事長代理をやっていただき、四月に大木理事長に交代することになります。殷鑑遠からず、前車の轍を踏まないよう、慎重に学会運営に当たっていただきますよう願っています。

せっかく理事長に選ばれたのに、不祥事つづきでお気の毒、と言ってくれそうな方もおられるだろうが、本人は特段そうは思っていない。というのも、これで歴代理事長の中での新記録保持者になれたのである。まずは、はじめて大会を中止した理事長を皮切りに、はじめて参加費を返却、はじめてのオンライン大会を開催、かつはじめて在任中に大会で研究発表、はじめて学会報を再発行、おまけをつければ、博士号をもっていないたぶんはじめての理事長、日本国籍をもっていないはじめての理事長、仕上げが辞任したはじめての理事長である。

これだけのはじめての記録はそう簡単には破れないだろう。将来もし学会百年史が編纂されれば、異色の新記録保持者として、学会史に長くその名をとどめるに相違ない。あまり名誉とは言えない「はじめて」が多いのでは、とおっしゃる方もおられるだろうが、流芳百世あたわずんば、遺臭万年とうそぶいた古人もいた。「遺臭」はまあなんとか勘弁してもらえるのではないだろうか。

それより残念に思ったことは別にある。この二年間、大

変だったのは、なにも本学会だけではない。世の中全体、いや世界中が大変のオンパレードであったことは、ご承知のとおりである。本学会にも関係する近い例でいえば、日本学術会議の任命拒否の問題がある。

これについては本学会も、六名の委員を任命しなかった理由を明らかにするよう声明を、理事会、評議員会の連名でホームページに掲載し（十月九日）、さらに人文系の諸学会が連携して出した声明にも賛同したが、さしたる効果はなく、日本中国学会がしかじかの声明を出したというようなメディアの報道もむろんなかった。

ところがイタリア学会の声明は大きく取り上げられた。私が見ただけでも新聞二紙に報道されている。イタリア学会の声明も当学会のホームページに掲載されているが、これはガリレオからカエサル、アイスキュロスなどを出典明記で引用した洋々数千言におよぶ堂々たる文章である。イタリア学会でなければ出せない声明で、特に古代ローマでは将軍が凱旋した時、兵士たちが罵詈雑言をわざと浴びせて増上慢を戒めたという話が印象的で、私が見た二紙いずれもこの話を取り上げていた。

私は新聞でこれを読んで、しまったと思った。本学会も声明を出すならもっとよく考えて、中国学会らしい特色のある文章を書くべきであった。本学会の声明はたったの四行である。これも新聞報道で知ったが、首相は『貞観政要』を愛読しているそうである。言うまでもなく、唐の太宗が臣下の諫言を受け入れて、治世を成就した、求諫、納諫、直言諫諍が主たる内容である。首相の言動から察するに、あるいは反面教師として読んだのかもしれない。ならば書くべき材料はいくらでもあったはずである。

本学会が声明を出したのは大会開催日の前日で、準備に追われ、心の余裕がなかったのも事実だが、これは言い訳にすぎないだろう。平素から事の軽重を考え、学者としての本分を忘れずに、しかも機敏に行動できる心構えに欠けていたというほかはない。これが在任中もっとも残念に思ったことである。

ところで先日、本学会のホームページを見ようとして、偶然あやまって「百度」を検索してしまった。ところが意外にも「百度百科」には「日本中国学会」の項目があった。さらに意外だったのは、その「基本簡介」におよそ次のようなことが書いてあったことである。

この学会の本部は東京湯島の孔子廟にあり、このことはこの学会が戦前の日本漢学、支那学の伝統を踏まえていることを象徴している。七十年代の後期より、この学会は中国学研究者の交流の場として、“同业帮会”に似た機能をはたしている。中国近現代の問題を研究する者も増えてはいるが、『学会報』所載論文を見ると、依然として古典研究が中心である。この学会は規模こそ大きいが、その研究の実際の成果を見ると、“很难说收到了应有的效果”というのである。これには驚いた。百科事典には、この種の主観的評価は書かないのがふつうだろうに、どういわけであろうか。

むろんこのような評価を気にする必要は毫もない。朱子流に言うならば、というとまた旧態依然、古典中心と言われそうだが、「有則改之、無則加勉」の態度で臨めばよい。ただし“应有的效果”つまり「まさにあるべきの効果」、言い換えるならば、学会としてのあるべき姿はどうなのかは、この「基本簡介」の執筆者の意図とは関係なく、考えてみたい。

この二年間の大変な事態として、学術会議の問題以上に、本学会、会員ひいては日本の中国学研究者にとって切実な問題は、中国をめぐる内外の情勢の変化であろう。古典と近現代を問わず、今後の中国研究については、現在の中国といかに向き合うかが問われ、それによって研究の方法、態度も影響を受けるに違いない。本学会の「まさにあるべきの効果」に疑問がもたれるなら、では中国における中国研究はどうなのか、あるいは他山の石と言えるかもしれない。

私はたとえ辞任せずとも、もうすぐ定年の七十歳に手がとどく老人である。今後は好きな本でも読んで余生を終える気楽な身分である。しかしこれから研究生活に入る人、今後もしばらく研究をつづける人にとって、これは大きな問題であろう。世の中を見渡し、事の軽重をよく考え、しかも中国学研究者としての立ち位置を忘れずに、適確にかつ果敢に発言し行動するのは、いよいよ難しくなるだろう。それだけにやりがいのある仕事と言える。会員諸氏の今後の健闘を祈りたい。

コロナ以前の「戴復古五律読書会」

東洋大学
坂井多穂子

筆者は今年度、サバティカルで本務校の授業担当を免除されたが、コロナ禍のために一年間の渡華の予定も消えた。やむなく都内で蟄居していたところ、学会便りの執筆を依頼された。例年であれば国際学会の参加報告を書くべき本欄であるが、今年はそもそも開催されない。国内学会は本学会を含め、いくつかオンラインで開催されているが、当事者の苦労をさほど知らぬ筆者はそれを語る立場にない。そこでコロナ以前の懐かしき対面式読書会の日々を振り返ってみたい。

「戴復古五律読書会」は南宋後期の江湖詩人、戴復古（1167－1248。字は式之、号は石屏）の五言律詩を読む会である。内山精也氏が主催し、毎月第2土曜の午後に早稲田大学で開催されていた（2020年10月現在はオンラインで研究発表のみ開催）。『戴復古詩集』（浙江古籍出版社、1992年）を底本に、明弘治本や清嘉慶本の『石屏詩集』と対校し、用例や資料を調査して読み進めている。毎回、担当者が２、３首準備し、前回の担当者の修正稿も併せて参加者全員で検討する。筆者が2008年に初めて参加した時は巻二を読んでいる途中であったが、2016年にようやく巻三に突入した。五律は巻二から巻五まであるので、今のペースではあと２、30年かかる計算になる。読書会の成果は『江湖派研究』（不定期。現在第四輯まで刊行）に「戴復古五律譯注」として随時発表されている。また、『アジア遊学　南宋江湖の詩人たち―中国近世文学の夜明け』（内山精也編、勉誠出版、2015年）は、国内外の研究者27名の論文等を結集したもので、「江湖派研究会」（本会の別称）の主要な成果物である。

南宋後期は近世の幕開けの時期であり、近世の詩は「通俗化」が重要なキーワードとされている。通俗化は詩型や表現、内容等に見ることができるが、江湖詩人の台頭それ自体が、通俗化の体現であると言えよう。なかでも戴復古は終生不仕の、典型的な江湖詩人である。江湖詩人は近体詩をよくする。戴復古の現存作品の半数が五律であることも、彼を江湖詩人の代表にした。本会で戴復古の五律を読む所以である。

いったい戴復古の詩は用典が少ないばかりか、屈折していて分かりづらいため、長時間の議論を経て結論が出ないこともままある。みずからの読解力を棚に上げて、「戴復古ら江湖詩人の価値は、作品の巧拙や含蓄にあるのではなく、市井の詩人集団という存在自体にあるのではないか」とか、「李杜や蘇陸などの大詩人に比べればあまり上手い詩だとは思えない」などの軽口が参加者（筆者など）から発せられることもしばしばあり、またそのような発言が許される気さくな雰囲気がこの場にはある。

会の参加者はいずれも関東在住の中国学研究者で、種村和史氏（慶應義塾大学）や河野貴美子氏（早稲田大学）をはじめ、阿部順子氏（慶應義塾大学・非）、加納留美子氏（相模女子大学）、荒井礼氏（宇都宮大学・非）、橘千早氏（中央大学・非）らを中心に、所属大学の枠を超えて教員や院生が集う。宋代文学を専門とする者が多いが、中国哲学や東洋史の研究者も交え、参加者は10名程度から多い時は20名を超える。関東滞在の中国人研究者や留学生が過半数を占めて、中国語での議論が飛び交うこともある。

振り返れば筆者がまだ関西で一学生だったころ、「関西

の研究会は所属大学の枠を超え、関東の研究会は各大学の内部で開催される」と聞いていた。あれから20余年、東京で幾つかの研究会にお邪魔してきたが、偶々なのか経年による変化なのか、いずれの会でも参加者の所属大学は様々で、「関西方式」（？）での開催であった。

話を戴復古読書会に戻す。会では詩を読むだけでなく、国内外の学者の講演や研究発表が不定期開催される。例として昨年度（2019年度）の講演題目を次に挙げておく。

二〇一九年度の講演・研究発表（所属は当時）

【四月】 熊海英氏（湖北大学教授）「朝士・名士・遊士南宋中後期詩人的三種面相及其嬗變—以樓鑰爲張良臣、林憲和戴復古詩集所作序跋爲中心」

【五月】 麥慧君氏（ハーバード大学博士候補生）「微物的義：宋代談物文化中的譜錄寫作」
蔣旅佳氏（陝西師範大学副教授）「史部文章入集的文體學考察—以宋代爲中心—」

【六月】 蔣旅佳氏（陝西師範大学副教授）「宋代地域總集編纂分類的地志化傾向與影響」

【十一月】 林暁光氏（浙江大学副教授）「『閑情賦』の系譜を復元する試み——漢魏六朝文学の本文構造と文体性格を中心に」

【一月】 李瑄氏（四川大学教授）「呉偉業“梅村体”歌行的文体突破及其価値」

講演は宋代に関する内容が多いが、なかには六朝や清朝についての研究もある。講師は30代から40代を中心とする精鋭である。一昨年以前も若手や中堅の先生方が多かったように記憶している。彼らのなかには、日本宋代文学学会前会長の浅見洋二氏（大阪大学）や現会長の東英寿氏（九州大学）、また静永健氏（九州大学）の元におられ、発表の場を求めて上京して講演をおこなう方や、講演のために訪日し、終わるとすぐ帰国される方、さらには、訪日期間中はひたすら図書館に通い詰め、観光や遊びには興味を示さぬ方もおられた。彼らの精力的で真摯な研究態度にはまことに頭が下がる。

印象的だった講演を一つ挙げよう。林暁光氏は陶淵明の「閑情賦」の系譜を「復元」するに及んで、一つのたとえを提示した。考古学者が壺の破片を組み合わせて復元しようとしても、足りないピースは必ずある。考古学者は現存するピースの形から壺の全体の形を推測・想像して復元する。文学研究もかくありたい、すなわち散佚した部分を、現存する部分によって補う想像力と構築力を持つべきだ、と林氏は締めくくった。

会が終わると、高田馬場駅周辺で打ち上げをおこなうのが通例であった。ここ数年は、直前でも予約が取れる「さくらの庭　和創」の常連である。また、「高田馬場研究所」は料理が美味しく（特に〆鯖は絶品）、地酒の種類が豊富なため、種村氏のお気に入りだが、大人数では予約が取りにくい（なお、店の入り口には非常に躓きやすい段差がある。ご注意を）。これらの店には、コロナ危機を何とか乗り越えて欲しいものだ。

会の翌日（日曜）には、訪問学者の接待を兼ねて、近隣の観光地に足を伸ばすこともあった。昨年は、埼玉県春日部市の「牛島の藤」を観に行った。樹齢千年を超え、２メートルもの見事な藤の房が一面に並ぶ様は壮観であったが、「クレヨンしんちゃん」の春日部限定プリクラのほうが若い彼らの気持ちを惹きつけていた。別の日には三鷹市のジブリ美術館にも案内したが、ラピュタのロボット兵よりも、昼に吉祥寺で食べた手羽先のほうが喜ばれていたように思う。接待はなかなか難しい。

戴復古読書会からは離れるが、筆者の記憶にある限り、接待で一番喜ばれたのは、五年前の日本宋代文学学会翌日の鎌倉・江ノ島である。波打ち際では、（筆者を含む）ほぼ全員が裸足になり、童心に帰って水遊びをした。

本来ならば、今年は戴復古の郷里である黄岩（浙江省台州）や、近郊の雁蕩山や羅漢寺にも足を運び、その奇岩を鑑賞する筈であった。「山に游びて我も亦た癡なり」と戴復古が詠った雁蕩山を訪ねる日はいつになるだろうか。コロナが終息したとしても、自粛生活で衰えた体力をまず戻さねば、険しい山登りなどできはしないのだが。

中国文芸研究会—創設50年、研究誌100号超の老舗研究会

大阪市立大学
松浦　恆雄

中国文芸研究会は、1970年、中国文学研究（主に現代文学）を志す人々の自由な研鑽の場として結成された、関西に拠点を置く学術団体である。本稿では、まず中国文芸研究会（以下「文芸研」と略）の現況を説明したあと、今抱える問題点について触れ、最後に、新型コロナ・ウイルス下での文芸研の研究活動を紹介する。

まず、文芸研の現況から。文芸研の会員数は、2020年３月現在で235名。年会費が6000円。文芸研の一切の活動は、この会費収入と会員の熱意のみで賄われている。今、約20年以上前の1997年の会員数を確認してみると、240名であった。何とこの20年、会員数に大きな増減なく来ていることが分かった。減少傾向にないことは一安心であるが、決して楽観できる状況にはない。この点はまた後ほど触れる。

では、年会費6000円を払って会員になると、どういう特典があるのか。

第一に、会員は文芸研の定期刊行物（研究誌と会報）への投稿資格を得ると同時に、その無料配布を受けることができる。研究誌『野草』（編集者毎号交代）は、平均180頁ほどで、年２回の刊行、頒価は2500円。最新号は105号（2020年）。文芸研のホームページに入っていただくと、バックナンバーの目次がご覧いただける。『野草』は、文芸研の看板であり、ここに文芸研の水準が現れる。ゆえに、毎回編集には細心の注意を払い、合評にも力を入れ、記録もしっかり取って『野草』に掲載している。

『中国文芸研究会会報』（担当：永井英美・三須祐介ほか）は毎号概ね８～12頁、年11回刊行、最新号は468号（2020年10月）。こちらは会員のみの配布で、市販していない。会報は、例会や研究会の記録の外に、研究の小ネタや翻訳、学会参加記など、多彩な内容を含む。紙媒体と電子媒体がある。

第二に、例会（担当:濱田麻矢）での報告資格を得る。例会は年10回、２月・８月を除く毎月最終日曜午後１時～５時の開催である。参加者は平均20名くらい。毎回の報告枠は２名。１名当たり１時間程度の持ち時間である。時間の短い学会と異なり、例会ではたっぷり語ってもらえる（にもかかわらず、しばしば時間不足となる）。報告後は、論の組み立てから資料の読み方、誤字脱字まで、巨細とりまぜた参加者の意見を、これまたたっぷり聴くことができる。これが学会にはない例会最大のメリットであろう。さらに望めば、例会後の飲み会での延長戦もOK。

文芸研の会計年度が４月始まりであるため、毎年４月は総会と講演会に当てられる。講演会は、なるべく中国文学以外の専門の方をお招きし最新の研究成果などをご披露いただく。また、年２回の例会を『野草』の合評会に当て、12月は書評と忘年会で盛り上がる。

第三に、夏期合宿（担当：城山拓也・大東和重）に参加できる（費用は自前、実は会員外の参加も可）。例年、８月末～９月初めに開催し、特集を組み集中的に討論する。開催場所には温泉宿が多く、例会以上に集まりが良い。30名平均の参加者である。一風呂浴びてさっぱりすれば、酒も議論も進もうというものである。そう言えば、年長会員からの差し入れなどという美風もあった。

第四に、文芸研の下部組織である研究会に参加できる。

現在、「映画の会」（担当：菅原慶乃）、「自伝・回想録を読む会」（担当：絹川浩敏・今泉秀人・大東和重）、「京劇史研究会」（担当：松浦恆雄）が設けられており、それぞれ独自に例会以外の時間を利用して活動している。また、これらの研究会が研究集会などを開くこともあり、会員は、こういう情報にもアクセス可能である。

会員の特典（文芸研の主な活動）は大よそ以上である。

文芸研には、これらの外に、「特別事業」計画（担当：宇野木洋）や野草ネットワーク（担当：青野繁治・菅原慶乃）などの担当部署がある。「特別事業」計画では、例えば、「自伝・回想録を読む会」に蓄積されている自伝・回想録の解題を編集・刊行する事業や『野草』のバックナンバーの web 公開事業などが検討されている。

では次に、文芸研が抱えている問題点について。現在、中国文学研究をめぐる社会環境が理想にほど遠いことは、もはや贅言を要しないだろう。その結果、もともとそれほど多くない中国文学を学ぼうとする大学生数が全国規模で減少し、近年では、大学院に進学して研究者を目指す日本人学生は、殆ど絶滅危惧種になっている。文芸研においても事情は同様。院生がいないから、会員も増えない。特に、20代、30代が壊滅状態であり、今後も回復の見込みはない。にもかかわらず、会員数が維持されているのは、中華圏からの留学生が多く新入会員になってくれているからである。実際、彼らは優秀で、日本で職を見つけて文芸研の中枢を担う存在になっている。本当にありがたい。とは言え、留学生の多くはやがて帰国する。文芸研の将来にどんより垂れこめた暗雲をいかにして払拭するか。今後ともどんどん優れた人材が集まってほしい。できれば日本人院生も少し含めて……。

最後に、新型コロナ・ウイルス下における文芸研の研究活動について報告したい。まず、2019年度３月例会が中止になった。４月になっても新型コロナ・ウイルスの脅威は鎮まらず、４月総会はズームによる開催となり、講演会は中止となった。総会では、５月例会以降、当分の間、ズームでの例会開催を継続することを決めた。５月、６月、７月。さらに９月、10月。毎回２名ずつの例会開催がズームで続く。報告者はみな事前にレジュメをアップ。参加者数は、通常の３～４割増しの30人程度。瞬間最大参加人数は41名。海外では、ニューヨーク、北京、上海、武漢からのアクセスがあった。国内では、北海道、東北、東京、名古屋、九州など。ただ、逆に身近な会員の姿が少し遠のいたのが残念である。

また、『野草』の編集作業が遅れ、106号と107号を合併号にすることになった。『会報』は毎月きちんと編集されているが、ズーム例会で人手の確保が難しく、紙媒体の郵送が滞りがちだ。問題は色々ある。しかし、物事に良いことづくめも悪いことづくめもない。11月の例会はズームで29日。とりあえず、これが次の目標である。

1997年度夏期合宿（奈良県吉野）

2012年３月『野草』合評会（関西学院大学梅田キャンパス）

北京の私設図書館「雑・書館」訪問記

京都大学大学院
呉　雨彤

2020年正月に、民国期『紅楼夢』演劇及び口承文芸の上演状況を調査するため、北京にある国家図書館を訪問した。わずか一週間の休みを効率的に利用するため、事前にインターネットで民国期に刊行された新聞雑誌など、色々な情報を調べる中で、非常に精妙に作られたとあるページが目に入った。書籍情報のほか、雑誌の表紙や目次の写真までが掲載されている。この意外な発見に狂喜した私は、それが「雑・書館」という名の図書館であることを確認し、年始の訪書計画に入れることにした。

この「雑・書館」は北京の北東部にあり、かなり豊富な蔵書を持っているようである。事前予約が必要だが、無料で公開する方針はありがたい。12月27日、北京に到着し、web サイトの説明に従って翌日からの入館予約を取った。28日の早朝、地下鉄15番線馬泉営から地上に出ると、建築現場や日光浴をしている野良犬などの光景が眼前に現れ、まさか場所を間違えたのではないかと思われた。スマートフォンでマップアプリを確認しながら15分くらい歩き、ようやく「雑・書館」の看板が見えた。

そこには、白い建物が何棟も集まっていて、その中の二棟が「雑・書館」である。1949年以降の書籍と新聞雑誌は二棟の内の一棟「新書館」に置いてあり、清末から1949年までのものはもう一棟の「国学館」にある。私が行くのはその「国学館」であることは予約時にすでに確認していたが、少々わかりにくいのか、「雑・書館」での滞在中に予約を間違えた訪問客がほぼ毎日いた。幸い、当日の接待人数300人との上限を超えない限り、その場で予約をし直すことは問題がない。

国学館は三階建てで、カウンターで予約情報を確認後、一階にある「特蔵新書館　西文漢学館」開架閲覧室に入ることが許される。カバンを預けると、右手に四台の長机が並んでいる。二列の高い本棚に向かって、通路を真ん中くらいまで歩いたら、約半分の本棚が白い紐で括られ、しばらく閲覧できない状態になっていることに気付いた。ほかの開架書籍は自由に手に取って、館内閲覧ができるが、私が探している清末から民国までの雑誌は上の階の「晩清民国期刊館」に属しているので、申請書を書き込まなければいけない。本の出納は一回あたり一冊ずつ、読み終えたら返却して、次の一冊の貸し出しを申し込むシステムである。

国学館は八部門に分けられている。一階には「特蔵新書館　西文漢学館」の開架閲覧室以外に、「名人信札手稿档案館一館」もある。二階は「線装古籍館」「民族民俗古籍館」及び「名人信札手稿档案館二館」からなる。三階

は「晩清民国期刊館」と「民国図書文献館」である。一階の開架閲覧室以外は一般の訪問客には開放されていないが、見学を申し出て館員に案内してもらうことは可能である。案内してくれた館員の話によると、「名人信札手稿」の一部は関係者の寄贈によるもので、公開展示をしたこともあるが、物議をかもしたことがあり、やむを得ず非公開にしたそうである。

この「雑・書館」は有名な古書購買サイト「孔夫子旧書網」によってはじめられたことを館員から聞いた。だからすぐ隣の建物が孔夫子のオフィスだということもおかしくないのである。しかし、有名人の高暁松氏が館長を務め、高氏のテレビ・インターネット番組と SNS で積極的な宣伝が行われていたことは全く知らなかった。

非営利の私設図書館として、「雑・書館」の百万冊近くの蔵書は大半が個人蔵で、国家図書館や上海図書館などのような大型国立図書館と異なることも、その蔵書傾向から大体感じられる。印刷当時の刊行部数や現存数などによって、その本の価値が大きく左右されるが、初刷や創刊号であるかどうか、作者のサインがあるかどうかということも選書基準になっているようだ。

「雑・書館」は百万冊という驚くべき収蔵量を誇る一方で、非営利の図書館であるからこそ、人力が届かないところがあり、整理編集が未完了の本が過半数という印象を受けた。紙の劣化などの原因で貸し出しができない本もたくさんあり、国学館で管理が完備され閲覧可能なものは、開架の部分を除けば、現在のところ、前述の「晩清民国期刊館」と「民国図書文献館」だけである。にもかかわらず、この二館の蔵書は几帳面に整理され、インターネットで見つけた詳細な書籍情報などはまさにその「晩清民国期刊館」の蔵書であった。

館員に案内してもらい、二階にある「線装古籍館」「民族民俗古籍館」も見学した。すべての蔵書がガラス扉の本棚に収められ、いまは禁帯出、戯曲小説以外に宝巻、鼓詞、弾詞、潮歌、木魚書などの民間口承文芸の唱本も見える。館員の説明では、館内蔵書のうち、古籍は宋元時代を最古とするが、宝巻類は唐まで遡ることができるという。今回は、その実態を見ることは叶わなかったが、いつか「雑・書館」のすべての古籍資料が整理され、閲覧できることを願っている。一般読者にとっても、研究者にとっても、資するところ大であるに違いない。

真冬の日に、「雑・書館」内では終日お湯と温かいお茶を無料提供し、みかんやあめ、インスタントコーヒーなどまでもテーブルの上に置かれていた。「雑・書館」で四日間充実した時間を過ごし、次は２月と夏休みにも訪問しようと思っていたのに、コロナウイルスの影響でその計画は成し遂げられなかった。この訪書記を書いている10月現在、ホームページの予約欄にはまだ閉館中と書いてある。わずかな記憶を頼りに書いたこの小文が、同好の研究者の参考になることを願うとともに、コロナウイルスが一日も早く終息して中国に自由渡航ができる日、「雑・書館」再開される日が来ることを待ち望むばかりである。

予約方法：電話・ホームページ・WeChat 公式アカウント

予約を取るとき、身分証番号と電話番号を要求されるが、館員に確認した結果、中国大陸居住者でない場合はパスポートナンバーや他の身分証明書番号など、予約及び入館時に身分確認ができるものなら問題がない。電話番号は忘れ物がある際などの非常時連絡用で、中国大陸の携帯番号を持たない方は同行者や知り合いの電話番号を記入すればいい。

http://www.zashuguan.cn/

日本中国学会 2019年度（平成31年・令和元年度）収支決算書

2019年４月１日～ 2020年３月31日

（単位：円）

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
収入の部	1. 前年度繰越	¥19,270,270	¥19,270,270		¥0
	2. 会員会費	¥9,000,000	¥9,179,000		¥179,000
	3. 寄付金	¥800,000	¥785,000		¥-15,000
	4. 預金利息	¥200	¥129		¥-71
	5. 著作権料分配金	¥0	¥0		¥0
	総　計	¥29,070,470	¥29,234,399	(A)収入総計	¥163,929

	科　目	予　算	決　算	摘　要	差　額
支出の部	**1. 事務局総務費**	¥2,660,000	¥2,108,412	(1)～(7)	¥551,588
	(1)印刷費	¥650,000	¥341,794	「便り」・封筒印刷費を含む	¥308,206
	(2)通信費	¥650,000	¥436,328	「便り」発送費を含む	¥213,672
	(3)交通費	¥100,000	¥50,780	事務局補佐員交通費等	¥49,220
	(4)消耗品費	¥50,000	¥5,943		¥44,057
	(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
	(6)雑費	¥950,000	¥1,063,567	振込手数料、HPリニューアル費用を含む	¥-113,567
	(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
	2. 事務局人件費	¥1,560,000	¥1,686,000	(1)(2)	¥-126,000
	(1)幹事手当	¥360,000	¥540,000		¥-180,000
	(2)謝金	¥1,200,000	¥1,146,000	事務局補佐員謝金を含む	¥54,000
	3. 事務局会議費	¥420,000	¥435,820	(1)(2)	¥-15,820
	(1)会議費	¥120,000	¥88,914		¥31,086
	(2)役員旅費	¥300,000	¥346,906	第１回理事会ほか	¥-46,906
	4. 事業費	¥4,800,000	¥4,533,531	(1)(2)	¥266,469
	(1)学会報等刊行費	¥3,800,000	¥3,533,531	イ～ニ	¥266,469
	イ. 印刷費	¥2,000,000	¥1,828,805	学会報及び名簿	¥171,195
	ロ. 編集費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥213,500	英文要旨作成	¥86,500
	ニ. 発送費	¥300,000	¥291,226	㈱サンセイ業務委託等	¥8,774
	(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,000,000	482,201円は返金費用	¥0
	5. 各種委員会運営費	¥1,230,000	¥577,084	(1)～(7)	¥652,916
	(1)大会委員会	¥65,000	¥44,860		¥20,140
	イ. 通信費	¥5,000	¥620		¥4,380
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥39,240		¥10,760
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(2)論文審査委員会	¥780,000	¥394,626		¥385,374
	イ. 通信費	¥100,000	¥87,744		¥12,256
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥230,098		¥369,902
	ハ. 謝金	¥60,000	¥72,000		¥-12,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥4,784		¥15,216
	(3)出版委員会	¥225,000	¥110,546		¥114,454
	イ. 通信費	¥5,000	¥140		¥4,860
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥89,234		¥110,766
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥6,172		¥-1,172
	(4)選挙管理委員会	¥20,000	¥5,672		¥14,328
	イ. 通信費	¥5,000	¥672		¥4,328
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(6)広報委員会	¥100,000	¥11,380		¥88,620
	イ. 通信費	¥15,000	¥370		¥14,630
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥6,010		¥43,990
	ホ. ホームページ管理費	¥25,000	¥0	HPリニューアルは事務局雑費	¥25,000
	(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	1～5	¥10,670,000	¥9,340,847	特別会計（学会基金・学会賞）に充当	¥1,329,153
	特別会計積立基金拠出		¥1,000,000		¥-1,000,000
	予備費	¥18,400,470	¥823,010	第71回大会参加費返却	¥17,577,460
	合　計	¥29,070,470	¥11,163,857	(B)支出合計	¥11,163,857
	次年度繰越金	－	¥18,070,542	(A)収入総計－(B)支出合計	
	総　計	¥29,070,470	¥29,234,399		¥-163,929

学 会 基 金

	基　本　金	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥557,502
	特別会計積立金拠出	¥1,000,000
	預金利息	¥304
	信託収益金	¥0
	合　計	¥1,557,806
支出の部	日本中国学会賞	¥240,000
	次年度繰越金	¥1,317,806
	合　計	¥1,557,806

備考（基本金内訳）

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2020年８月11日
日本中国学会監事

牧角悦子
市來津彦
内山精也

日本中国学会 2020年度（令和２年度）予算書

2020年４月１日～ 2021年３月31日

（単位：円）

	科　目	予　算	摘　要
収入の部	1. 前年度繰越	¥18,070,542	
	2. 会員会費	¥9,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥200	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合　計	¥27,870,742	

	科　目	予　算	摘　要
支出の部	**1. 事務局総務費**	¥2,460,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥850,000	「便り」・封筒等を含む、改選年
	(2)通信費	¥850,000	「便り」発送費を含む、改選年
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥350,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
	2. 事務局人件費	¥1,740,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥540,000	
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥720,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥120,000	
	(2)役員旅費	¥600,000	第１回理事会＋引き継ぎの第４回理事会
	4. 事業費	¥4,800,000	(1)(2)
	(1)学会報等刊行費	¥3,800,000	イ～ニ
	イ．印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿
	ロ．編集費	¥1,200,000	
	ハ．翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
	ニ．発送費	¥300,000	(㈱サンセイ業務委託等
	(2)学術大会運営補助費	¥1,000,000	

	科　目	予　算	摘　要
支出の部	**5. 各種委員会運営費**	¥1,330,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥65,000	
	イ．通信費	¥5,000	
	ロ．会議・旅費	¥50,000	
	ハ．謝金	¥5,000	
	ニ．消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥780,000	
	イ．通信費	¥100,000	
	ロ．会議・旅費	¥600,000	
	ハ．謝金	¥60,000	
	ニ．消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥225,000	
	イ．通信費	¥5,000	
	ロ．会議・旅費	¥200,000	
	ハ．謝金	¥5,000	
	ニ．学会便り編集費	¥10,000	
	ホ．消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	¥120,000	改選年
	イ．通信費	¥15,000	
	ロ．会議・旅費	¥60,000	
	ハ．謝金	¥40,000	
	ニ．消耗品・雑費	¥5,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	
	イ．通信費	¥5,000	
	ロ．会議・旅費	¥5,000	
	ハ．謝金	¥5,000	
	ニ．消耗品・雑費	¥5,000	
	(6)広報委員会	¥100,000	
	イ．通信費	¥15,000	
	ロ．会議・旅費	¥5,000	
	ハ．謝金	¥5,000	
	ニ．消耗品・雑費	¥50,000	
	ホ．ホームページ管理費	¥25,000	
	(7)将来計画特別委員会	¥20,000	
	イ．通信費	¥5,000	
	ロ．会議・旅費	¥5,000	
	ハ．謝金	¥5,000	
	ニ．消耗品・雑費	¥5,000	
	１～５	¥11,050,000	
	予備費	¥16,820,742	
	合　計	¥27,870,742	

学 会 基 金

	基　本　金	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥1,317,806
	預金利息	¥500
	信託収益金	¥ 0
	合　計	¥1,318,306
支出の部	日本中国学会賞	¥240,000
	次年度繰越金	¥1,078,306
	合　計	¥1,318,306

備考（基本金内訳）

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長　赤井　益久

（1）第72回大会について

2020年度第72回大会は、コロナウィルス感染予防の観点から、慶應義塾大学によりオンデマンド方式によるオンライン学会として開催されました。昨年に続く大会開催中止を回避するため、開催校と数次にわたり協議を経て決定しました。今までに経験の無い事態を想定しながらの運営でありましたが、開催校である慶應義塾大学の周到な準備と協力を得て、10月10日（土）と11日（日）の両日に渡って開催されました。哲学・思想部会６、文学・語学部会16、日本漢文部会４の研究発表がありました。初日の参加実数は488名、HP 閲覧回数延21525回、動画再生回数延1617回、書き込み件数132（除、司会者）。二日目、405名、HP 閲覧回数延13721回、動画再生回数延680回、書き込み件数188（除、司会者）でした。オンラインによるメリット及びデメリット等を勘案して改善する余地があるにせよ、十分な成果があったと言えます。今後、対面式学会開催の代替的な措置として、今回の経験は向後に生かされなければなりません。

（2）2021年度第73回大会について

明年度、2021年日本中国学会第73回大会は、愛知大学（〒453-5777　愛知県名古屋市中村区平池町４－60－６　愛知大学名古屋キャンパス　大会準備会代表臼田真佐子会員）において10月初旬に開催されます（日程は決定次第お知らせします）。観光シーズンとも重なりますので、早めに宿泊施設などの予約を取るようにお願い致します。

（3）オンライン学会のアンケートのお願い

今回のオンライン学会の開催に関して、本学会「将来計画特別委員会」によるアンケートが実施されますので、ご意見ご要望をお寄せ下さい。大会委員会としては、大会開催時期、緊急時対応の在り方について、引き続き検討をして参ります。

（4）開催校の合同引き継ぎ会議について

2020年10月31日（土）、第72回大会開催校（慶應義塾大学）と第73回開催予定校（愛知大学）、及び71回大会開催校（関西大学）の代表者による合同引き継ぎ会議を開催しました。学会としては経験の無い事態が続きましたので、万全の体制を取るべく、新大会委員会の正副委員長をも交えてオンラインにより開催しました。

【出版委員会】

委員長　静永　　健

７月26日（日）第１回出版委員会をオンラインで開催し、学会報第72集の編集状況の確認、および学界展望（2019年１月～12月、今回は語学部門のみ）の原稿の読み合わせを行いました。

【選挙管理委員会】

委員長　松原　　朗

本年度は、会則第11条にもとづき、評議員選挙、理事長選挙、監事選挙を以下の日程で行った。なお日程全体は、新型コロナウイルスの感染状況を考慮して当初の計画よりほぼ１ヶ月遅らせた。それぞれの結果については、別途公表されているのでここには記さない。

１）評議員選挙

令和２年（2020年）７月４日（土）に専修大学において投票用紙を発送し、８月１日（土）に同大学において開票を行った。

２）理事長選挙

令和２年８月22日（土）に専修大学において投票用紙を発送し、９月19日（土）に同大学において開票を行った。

３）選挙管理委員会の開催

令和２年10月３日（土）にオンライン（zoom）で選挙管理委員会を開催した。また次期選挙管理委員会に、電子投票移行への方針を申し送ることで合意した。

４）監事選挙

令和２年10月９日（金）にオンライン（zoom）で開かれた次期評議員会において zoom 機能を用いて投票と開票を行った。

【将来計画特別委員会】　委員長　佐竹　保子

学会ホームページで、アンケートを実施することとなりました。

期間は２月末日まで。学会ホームページ上のアンケート URL から、パスワード（本学会便り最終頁にあります）で入ります。

内容は、初めてのオンライン開催となった本年度大会への出欠、大会実施方法への感想、学会への気づきや提案等を問うもので、最短で５分もかかりません。

どうぞご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

以下は、本委員会の今年度活動報告です。

○2020年４月22日～５月22日　メール会議

４月21日理事会にて「他学会の例を参考に危機管理マニュアル案を作る」よう要請があり、５月23日にその案が理事会によって承認された。

○2020年９月22日～９月30日　メール会議

２年間の仕事内容のまとめと、学会に関するメンバーの意見聴取を行った。

○2020年10月13日～10月15日　メール会議

９月のメール会議に引き続き、学会に関するメンバーの意見聴取を行った。

○2020年10月18日～10月28日　メール会議

10月17日理事会に、９月と10月の本委員会メール会議の内容を報告し、それを契機に理事会より「大会および学会についてのアンケート実施案を作る」よう要請があり、10月28日に理事会に提出した。

○2020年11月１日～11月３日　メール会議

上記アンケート実施案に対する、理事会メール会議（10月30日～11月１日）での意見に基づき、同案改訂版を作成し、11月３日に理事会に提出した。

○2020年11月３日～11月18日　メール会議

アンケート項目について、引き続き、第72回大会準備会、広報委員会、大会委員会と協議した。

2020年度 会員動向／新入会員一覧

◉会員動向（2020年9月27日現在）

総会員数1571名、準会員数45機関、賛助会員数15社

◉退会会員

○退会申出会員（今年度第１回理事会承認分）23名、１機関

植木　久行	中野　道子	加藤　国安
三澤裕見子	金スンオグ	伊藤　直哉
寺村　政男	池上　貞子	伊藤美重子
吉池　孝一	詹　　千慧	福田　一也
平田　昌司	武田　時昌	太田　　斎
山本　敏雄	泉　　紀子	鎌田　純子
周　　雲喬	山根真太郎	石　　其琳
小川　郁夫	亀田　一邦	

神奈川大学外国語学部中国語学科（準会員）

○退会申出会員（今年度第２回理事会承認分）　12名

朱　　琳	北原　和茂	坂下　　聡
佐藤　信一	宮本　雅也	松永　正義
磯部　祐子	白石　尚史	衣笠　勝美
松村　　昂	杉山　　明	中尾健一郎

○４年間の会費滞納による退会会員　27名

◉住所不明会員　24名

井上　雅隆	岩本　優一	大井　浩之
何　　俊	加藤　眞司	金　　東鎭
熊野　弘子	佐藤　　良	関　　泉子
高橋　治世	竹内　光子	張　　齡云
陳　　維	陳　　熙	程　　遠
中村　　綾	藤村　浩一	宮内　四郎
森　　宏之	矢淵　孝良	楊　　韜
横山　健一	羅　　莞翎	廖　　海華

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

◉新入会員一覧

10月9日に開催された2020年度評議員会（オンライン会議）において入会が承認された方々は、以下の通りです。

◉通常会員　6名

廖　　嘉祈	東京大学（院）
竹宮　英明	東京大学（院）
陳　　璐璐	千葉大学（院）
王　　歓	京都大学（院）
村田　真由	大阪大学（院）
熊　　奕淞	広島大学（院）

なお、以下の方々については５月22日、６月３日付で開催された臨時評議員会（メール審議）において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

◉通常会員　18名

鍾　　卓螢	丁　　乙	齋藤慎一郎
武　　穎	浜田　直也	多田　光子
盧　　旭	張　　暁明	建部　良平
有永　真瑞	山路　　裕	耿　　沛涵
鄭　　玲玉	唐　　鈺	高　　磊
日　　扯拉	陳　　禕璇	景　　浩

訃　報

『学会便り』2020年第１号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

（敬称略）

塚本　照和	（近畿地区）	2017年２月
阿部　兼也	（東北地区）	2019年11月４日
堀池　信夫	（関東地区）	2019年12月21日
竹村　英二	（関東地区）	2020年２月15日
杉浦　　等	（関東地区）	2020年４月
内山　俊彦	（近畿地区）	2020年７月16日
佐藤　　仁	（九州地区）	2020年10月１日

2021～22年度役員一覧

◆理事長

大木　康

◆副理事長

浅見　洋二　吾妻　重二

◆理事

有馬　卓也　上田　望　宇佐美文理　木津　祐子　小島　毅
小松　謙　静永　健　鈴木　将久　野村　鮎子　松原　朗
三浦　秀一　柳川　順子　弛　和順　渡邉　義浩

◆監事

内山　精也（主席）　市來津由彦　牧角　悦子

◆評議員

阿川　修三　浅見　洋二　吾妻　重二　有馬　卓也　井川　義次
市來津由彦　上田　望　宇佐美文理　内山　精也　大木　康
大西　克也　岡崎　由美　小川　恒男　垣内　景子　加藤　敏
狩野　雄　釜谷　武志　川島　優子　稀代麻也子　木津　祐子
小島　毅　小松　謙　近藤　浩之　齋藤　希史　坂口　三樹
佐竹　保子　佐藤　大志　佐藤　正光　佐藤錬太郎　佐野　誠子
静永　健　末永　高康　鈴木　将久　高津　孝　髙橋　智
武田　雅哉　谷口　洋　種村　和史　土屋　育子　鶴成　久章
中里見　敬　永冨　青地　野村　鮎子　濱田　麻矢　東　英寿
藤井　省三　藤井　倫明　牧角　悦子　松尾　肇子　松野　敏之
松原　朗　松村　茂樹　三浦　秀一　三上　英司　緑川　英樹
柳川　順子　湯浅　邦弘　弛　和順　和田　英信　渡邉　義浩

◆顧問

池田　秀三　池田　知久　石川　忠久　今鷹　真　加地　伸行
川合　康三　興膳　宏　土田健次郎　戸川　芳郎　富永　一登
野間　文史　三浦　國雄　村山　吉廣　吉田　公平

◆幹事

上原　究一　遠藤　星希

事務局からのお知らせ

彙報

2020年度第１回理事会（５月18日開催、オンライン会議）での決定事項について、５月22日付で臨時評議員会（メール審議）を開催した。報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

・2020年度日本中国学会賞受賞者の決定について

［哲学・思想部門］

王　　雯璐　会員

「マニラ刊行『無極天主正教真伝実録』（1593）の研究 —— 同時代カトリック教理書との関連を中心として」

［哲学・思想部門］

韓　　淑婷　会員

「佐久間象山の『喪礼私説』について —— 幕末における『家礼』受容の一例」

［文学・語学部門］

井口　千雪　会員

「武定侯郭勛による『三国志演義』『水滸伝』私刻の意図」

【審議事項】

・新入会者の決定について

・顧問嘱任の件について

この他、本年度開催した臨時評議員会（メール審議）の審議事項は以下の通り。

４月29日付

・「学界展望」の延期について

４月30日付

・評議員選挙の延期について

６月１日付

・大会時の緊急事態対応ガイドラインについて

・本年度の大会について

７月19日付

・本年度大会の開催形態について

10月９日に開催した2020年度評議員会・次期（2021-22年度）評議員会（オンライン会議）における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

・理事長報告

・2021－22年度評議員選挙の結果について

・2021－22年度理事長選挙の結果について

・各種委員会報告

・『日本中国学会報』第72集及び会員名簿の発行について

・学会報編集担当校・大会開催校等について（2021年度）

学会報編集担当

甲斐　雄一　会員（明治大学）

学界展望執筆担当

哲学／渡邉　義浩　会員（早稲田大学）

文学／齋藤　希史　会員（東京大学）

語学／秋谷　裕幸　会員（日本中国語学会・愛媛大学）

学会便り編集担当（2020年度第２号・2021年度第１号）

静永　　健　会員（九州大学）

大会開催校　愛知大学

・会員動向について

・2021－22年度副理事長・理事の委嘱について

・その他

【審議事項】

・2019年度決算・監査報告

・2020年度予算案

・新入会員の承認

・2020年度総会次第について
・2021－22年度監事の選出
・その他

10月10日～11日の2020年度総会（オンデマンド配信）において、評議員会での議決事項を報告した。

◎顧問の委嘱について

2020年度第１回理事会（５月18日開催）、臨時評議員会（５月22日付、メール審議）の議を経て、次の二会員に顧問を委嘱することとなった。

土田健次郎　会員
富永　一登　会員

◎理事長代行について

理事長の「辞任の弁」にありますように、小島副理事長が会則第12条の２の規定にもとづき、2021年３月末日まで理事長の任を代行することになりました。

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。２ヶ年（2019・2020年度）未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、４年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、あるいはファックスをご利用ください。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を行っております。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページの URL をお送りいたします。なお、利用可能ブランドは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局
電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org
郵　便：〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：00160-9-89927
加入者名：日本中国学会

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1．日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2．応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3．原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。

4．原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のように定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、１行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。

5．図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（１行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6．原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。

7．引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。

8．原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文９ポイント、括弧内は８ポイントを、注はすべて８ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を９ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。

9．注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記については、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

10．中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11．応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。

12．学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13．原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年１月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内　日本中国学会

14．応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第１ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。

15．応募時には、本文・要旨をそれぞれ４部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。

16．応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校　　正

17．執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜　　刷

18．論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

そ　の　他

19．掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）　（平成13年５月13日修正）
（平成14年10月13日一部修正）　（平成15年10月５日一部修正）
（平成19年10月７日一部修正）　（平成20年５月17日一部修正）
（平成21年10月11日一部修正）　（平成22年６月６日一部修正）
（平成22年10月10日一部修正）　（平成23年10月９日一部修正）
（平成24年10月７日一部修正）　（平成25年３月31日一部修正）
（平成25年10月13日一部修正）　（平成27年10月10日一部修正）
（平成29年６月12日一部修正）　（平成30年６月３日一部修正）

本年度大会についてのアンケートのお願い

将来計画特別委員会委員長　佐竹　保子

2020年10月17日理事会で、「本年度大会についてのアンケート」を実施することが決まりました。

内容は、初めてのオンライン開催となった本年度大会への出欠、大会実施方法への感想、学会への気づきや提案等を問うものです。

期間は、この学会便り到着時から、2021年 2月末日 まで。

学会ホームページ を開くと、アンケートURL(http://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2121)が設定されてあります。パスワードを入れてお入りください。自由記述の部分もありますが、最短で5分もかかりません。

パスワード：ssj2020

本学会のさらなる発展のために、なにとぞご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2020年1月から同年12月末までに開催された国内学会の原稿は、来年（2021）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。

従来ご報告が無かった学会（研究会）のご報告も歓迎いたします。

なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

コロナ禍のもと、Zoom や Teams、あるいは YouTube 動画配信などさまざまな開催形態で行われたと思いますが、本紙ではそれらを一括して「オンライン開催」と表示させていただきます。

原稿送付先：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp（九州大学・静永あて）